

試験日 : 2026 年 2 月 21 日 (土)
入試種別 : 大学院入学試験(4 月入学)修士課程 春期試験
学部・研究科 : 文学研究科 真宗学専攻
科目名 : 専門科目

解答又は解答例

1

(1) 次に欲生といふは、すなはちこれ如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。すなはち真実の信樂をもつて欲生の体とするなり。まことにこれ大小・凡聖、定散自力の回向にあらず。ゆゑに不回向と名づくるなり。しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。このゆゑに如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向心を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに、利他真実の欲生心をもつて諸有海に回施したまへり。欲生すなはちこれ回向心なり。これすなはち大悲心なるがゆゑに、疑蓋雜はることなし。

(2) 次に欲生というのは、如来が迷いの衆生を招き喚びかけられる仰せである。そこで、この仰せに疑いが晴れた信樂を欲生の体とするのである。まことに、これは大乘・小乗の凡夫や聖者などの定善・散善の自力の心での回向ではないから、不回向というのである。あらゆる衆生は、煩惱に流され迷いに沈んで、まことの回向の心がなく、清らかな回向の心がない。そこで、阿弥陀仏は、苦しみ悩むすべての衆生を哀れんで、その身・口・意の三業に修められた行はみな、ほんの一瞬の間に至るまでも、衆生に功德を施し与える心を本としてなされ、それによって如来の大いなる慈悲の心を成就されたのである。そして他力真実の欲生心を、迷いの衆生に施し与えられたのである。すなわち、衆生の欲生心は、そのまま如来が回向された心であり大いなる慈悲の心であるから、疑いがまじることはない

(3) 第 18 願文にある三心(至心・信樂・欲生)と天親菩薩の『浄土論』の冒頭にある「世尊、われ一心に尽十方無礙光如来に歸命したてまつりて、安樂国に生ぜんと願ず。」についての問答(三一問答)の中、欲生に関する親鸞の御自釈である。元来は、行者自身が浄土に生まれんと欲する心を指すが、ここでは、「如来招喚の勅命」と指摘される。勅命は、「本願招喚の勅命」(行巻)にも記されたとおり、阿弥陀仏の衆生に対する大きな喚び声であり、この勅命を受けることにおいて、衆生(行者)に欲生の心が生じるのであり、そもそも衆生に欲生心があると語らない点に、親鸞教義の特徴をうかがうことができる。

2

(1) まことに知んぬ、聖道の諸教は在世・正法のためにして、まったく像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乖けるなり。浄土真宗は在世・正法・像末・法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したまふをや。

(2) いま、まことに知ることができた。聖道門のさまざまな教えは、釈尊の在世時代と正法の時代のためのものであって、像法や末法や法滅の時代とその人々のためのものではない。すでにそれは時代にあわず、人々の資質に背くものである。浄土の真実の教えは、釈尊在世の時代にも、正法や像法や末法や法滅の時代にも変りなく、煩惱に汚れた人々を同じように慈悲をもって導いてくださるのである。

(3) 正像末の歴史観（三時思想）に在世と法滅を合わせて時機を論ずるとき、聖道の教えは、在世・正法にふさわしい教えであることが示される。一方、浄土の真実の教え（浄土真宗）は、像法・末法・法滅のみではなく、在世・正法を合わせたあらゆる時代に生きる衆生のための教えであることが親鸞教義の特徴であると明かされる。

3

(1) しかれば、もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと、知るべし。

(2) このようなわけであるから、往生の行も信も、すべて阿弥陀仏の清らかな願心より与えてくださったものである。如来より与えられた行信が往生仏の因であって、それ以外に因があるのではない。よく知るがよい。

(3) 大行釈と大信釈に通じたまとめの文言であるが、真実の行・真実の信とは、いずれも衆生（行者）自身の行や信ではなく、阿弥陀仏の清浄な願心が回向するものであることが明かされる。自力回向ではなく他力回向について親鸞教義の特徴を明かす1文である。